

リ 8
號 5488
卷 2



海外新話卷之二

林則徐掌廣東政務事

黄爵茲の上書為一たるふ依て鴉片禁止の趣益嚴密ニ
其沙汰あつとりかこれ戒嗜好あるの後一日喫せざる所に渴
渴を支ふよう最苦ま心地ありされば海邊の土民等猶
禁を破りて休まぞ奸商其機を察一私小畜藏ある
所の鴉片煙を以て彼小鬻り此小販く程るく此事轍聞
小達セ一斧帝憤激一怒ひ如何にて其根源を断ち
去るほどの政法を解説せられめづ捷行奏して曰綏令
國內より有る所の鴉片家毎は藏一戸毎は積と

35.2.25
書入藏

久々も廣東の交易を嚴禁——一塊の烟土をトそ此方ふ入
ざるを爲其根源自ら消滅ちべし全體不於て根源を断
う所以来人猶私持來ると疑ひ先相應の人と擇
び其任を授くべ、雄り可うと尋ねる。林則徐と云者あり
公明正直且事を處するに頗る果敢あり。これを総督の委
任承受け専ら廣東の政務を掌らしむべと朝議是
一定を依て林則除は廣東總督の命を賜る。林則除の
衆人の中より抜擢され其身は大任を受れ。君恩肝
小銘ト此度こそ鴉片煙の根源を断ち塞ぎ永く中華の
賊害根冨有せんと天子折衷地は盟ひ道光十九年皇國の天保十年

の春北京と發里——途ふ九千里の道程を歷て廣東府
小着よけ依て先あ館の内ふ入り如何なる事やあると
巡察す。去年歸帆せしを商すも又渡來——既に館
中小充満せり夫よう出て湊口見渡せば二十四艘の英吉利
利船帆柱が連れて滞泊を尚又廣東の奸商等頻々
彼の館中出入り商人の為よ周旋——私ふ鴉片煙を
賣り極くの摸様をなれば林則徐容易に禁令の行
ひきだり。巡察——鄧廷楨と同く會淺りて其嚴禁の法
を設け先内地の居民を招き諭して曰く鴉片賣買の
事ハ去年禁令下れ如くされば益その令を固く守り

聊々遠犯あるべくぞ元來鴉片の毒物まると商人能是を
知れり故ふ自國の者ひ敵ふそれ吸食するを嚴禁ト
却て我中華の人民を騙く汝等久く其騙欺を受け
烟毒の身を害するを不悟らモ譬へ猶猩々の酒を嗜ミ
蛾の光り好む如一其嗜好も所の物より依て終小己の
身命を亡ふを智の勇うるもや以後遠犯するをたゞ決
意を容捨あと而る後又商館の夷人ふ向ひと若や
今年持来る所の鴉片烟あくバ其數を悉して今日
より二日を限り此方へ差出まくまゝ重よ遠ト
止む夷人等免角ふ自ら法犯の罪懲れ二日を

過れども有無の返答ふ及べ林則徐ハ大ふ怒り憎き
夷人どもくる去年禁止の令下り一紙も憚らモ又竊
ふ持渡り中華の貯室を食り取んとぞ愈その鴉片を
おまざベ汝等が盡く殺翠一人も許一還せ事やある
幸和蘭陀拂朗西米利加等の諸輩夷當地ふあり
て他日法を犯した者の戒め不せんと即ち數百人ふ干戈と
執りテ英吉利の商館ふ押寄る夷人ども斥逐大不辟
易一千三百十七函の鴉片を即時ふ差出モ林則徐
はらく思ふ其數猶不量あり依て又再三にわ戒責ると
久とも夷人言辭を飾り百計祕一藏して聊もかば

う、林則徐又一策を設け兵士の命より廢ふ繫げ檣舟
を奪ひ夷人等本船の通路を断ち截り土人小令、一切
の食物を本館に入らし禁を且館内不自由と彼が
為ふ日傭をうむ者をとぐく館外へか一置夷人を
て坐うる疲弊せむ如此をもと數日かして夷人大ふ
當惑一飢渴を待つ外あり且如何を由詮方をし
て見へけると林則徐と其情を察一又告て曰畜等
所の鴉片烟四分の一つを出さば日傭の者を給せん半を
おまえ食物を喰へん四分の二を出さば交易の事許容
うすべーと夷人今ハ飢窮ふ迫り計策を運らまふ力

き、竟小有る所の鴉片悉く差し出一且深く法を犯
すの眾を謝せり則徐北京へ早馬を立て此趣を奏聞
あすが帝其功を候び給ひ破がなも所の鴉片烟其地
ふれてこれ悉く焼捨てとの沙汰あり、林則徐ハ命
を奉りて直ふ首を焼んとあらう重て思業をもふ縱
令焼といふも其灰猶食べーと聞く然れば別々仕方
あうとぞ先に本燒燬して後其灰を塩及び石灰と混じ
數百人をしてこれを地上に撒きせらるゝのち海中ふ漂
棄ぬ夷人固より禁を犯すの還自らそれを知らざりども
餘り林則徐の所為峻酷猛烈きを見て心中大にして



於虎頭門
燒棄鴉片
煙土圖

活文集言卷二



怨々宿含モ館内ム止る數百の夷人即日此地を退去
夫より印度諸島の商館并小府城等小鎮で其田を訴入
召れば國在の軍官を始め商賈の輦車ム多キモ林則徐鄧
廷楨の二人を惡まざるハア猶又軍官の者より蒸氣船を
馳せて本國の女帝名ハ城剛時小麥進一歟此清國の人民
命を火砲の下に損一沿海の城池往々夷人の為モ奪
ひ取られ而億万の國財を費一徒々和睦を請求め其
事を了るの溫觸呈含章曰必欲斷鴉片根源
在絶其人不與交通貿易其害深而後絶之兵連禍
結非數十年不定而沿海奸民素貪其利將陰為彼

用且勝負兵家常任令中國小挫敗則滻啄紛乘羣
衆而攻之矣と如此事未だ首不說きよりが其先見
の明ある事今さう思ひやれど

英國使節到廣東事

廣東總督の政事甚ざ嚴酷而て交易通商の事禁
止一とより一と夷人等本國ム主導り又ハ印度近邊の
諸島も苗り皆々大ふ憤激一英吉利帝ヨーロッパニ
威脅しとぞ然れども國帝ニ反対制一止て曰仇讐を
報すと遵まみ船モ不知ト云々まをの如く兩國敗の有
を通ド數多の商船を來往一年くその利潤致得て

國民を富モとモ第一の事あれ此度ハ名ニ憤怒ノ心取
み公会を起モぐも此方ヨリ廣東總督の者へ先づ
一封の書翰を遣し以前の如く親交を結び且鴉片の
欠金十千五百六十万兩既償ハル若盡く金成以て之を
償ひ難くハ廣福兩省の茶を以て其半を出さしめて可
と兔角干戈を動ク圓財を空く費毛と勿れとあづれ
即ち一封の書翰子細を悉載せり而て使節小使を彼
等ハ勿々船ふ打乗り万里余の海程を歷て道光廿年
二月十五日廣東の港ふ着船モ十七日府城ふ到り右の
書翰發以て林則徐ふ追達モ則徐ハ云云一聞一大

の不憤り元來鴉片禁止の一條今ヨ初リたゞとあるぞ
既小乾隆嘉慶の間ヨ於て屢々公禁止モとゞども
汝國の奸商若竊モ持渡り内地の商民を詐き金
錢と交易モ其時小當門く若持渡るトモバ何を我
小欠金あらん今其欠金を債るとゞも聊々與之の
理ア又何ぞ西省の茶成以て金の半を償ふとせん
汝國王元來婦女子みて事の是非を辨へず耻辱
を忌び公然とそ書翰を我等小投モとゞも以後交
易通商の爰ハ決して辭客あらずとも居丈高より
てぞ罵りたゞ使節ハ云云成因とづぶ君命の重なる

以く歎止。唯く恭敬を厚く。林則徐小向ゆ。返輸成
績ひ。されば則徐即ち委負の者より命して其文を書せしむ
文内に裁き大臣在此尔小國不吠之犬膽敢遣使進
内索取烟洋本大臣要斬尔國來使以正下大清國
法今念使者無罪放回告汝等知悉本大臣威鎮三
山五岳計取四海九州兵精糧足如尔小國不守外
夷臣節本大臣即申奏聖朝提神兵率猛將出閏
下洋殺尽尔國片甲無存と此等の暴慢き語をのべ
其返輸を繰り、兵戍使節は後も使節の上も無れ
耻辱を受け既に則徐を一轍せんと思へども君主跋
着

せびつこそ不思されと張りき胸を推鎮ら他日必至此
恨み代被りんと心よ誓ひて退船一國都蘭噴きを歸
着

楊靖江於穿山洋襲夷船事

欽差尚書祁雋藻侍郎黃爵茲の兩人ハ金城奉く閩
省の海岸を巡見ありて英吉利の防禦あづきの由あれ
其直轍日々小嶺もうるゝ發れども夷船獨洋上まで運
漕を妨げ又内地の奸商遙う冲合小舟を出一鴻序
媚が交易してゆゑぞ此ふ於て諸將會議ありて曰く今
より以後夷船近海は搜覓禁直よろづに焚ひ燒けち

あて懲らすもうち他の計策あつてと車ら其用意せし
爰よ同知顧教忠きる者あつ已グ官俸を損して水勇三百
八十人を准ひ募りてお成商船十二艘より帆船一隻にて水師
提標楊靖江小抵サリ靖江の大喜び猶又卿勇三百
人を擇と加へて右の商船へ水勇と同くとれ承載せ一
人も參畠無ふせらむ清く商人の形状小体さく
武具を以て厚く船底よ悪一墨き沖合小先て老
船を探りたゞ四月二十一日果して莫毒の大船一艘穿
山洋上不至て破が御サリ云承見て諸船漸く近付
あは夷人の眞の商船ありと思ひ敢て驚怖毛々氣色

ゆ 楊靖江ハ此時戎装入ばとモとて李茂松又余ト
十二艘の船を二とようち一正一奇の法を以て左右よ
り押寄せ急よ火罐を敵船へ投擲る夷人ハ事の不善
小切を以て石火矢一挺放り暇うとて狼狽一々
木勇等又噴天烟とりて火炎を放ち夷船の帆檣を
額を彌シ自ら海中ふ投リ溺死する者多一靖江又
焼んとも夷人益恐惶一甚火を打消んとて髪を焦
下知して碇を高く敵船の船首を擗處よ引懸け等
所の船を駐む時木勇の長陳育ある者己が前小
あゆく脚を孰りよる者あ肩の上に両脚を組一まぐ

灌川かきより走船はしんと乗移のりおほる。これ伏見ふくみて水勇みずゆうを。我先われさきふと争あらそひて二十人余よ人じん衆しゆと戦たたかへ。捨刀すてとうを把つかて舟中ふななか放ほう廻まわり黑白しろくろの走人はしりんを嫌いやひそめ。身みに切きて筋すじ。改かひへ帆は綱つなを断きち。又またハ斧あxe巻まきを奪だつひこね。海中うみなかよ拋は擲てきむ。甚ごん勵はげ。身みの駿速しゅんそく。うと讐言しゆごんふ物もの。黒走くろはし八人じん白走しらはし十人じんを切教きやう。此時じ偶南風ううな大おほい吹ふき起おきる。走人はしりん如何いかが。乃のうち。之の鐵てつを自じら作つくれる所ところの渡綱わたつなを打破つきて船上ふなじゆの戰たたか。之の拘とまひ急きゆ。忙いそを罔まよく。大洋おうよと馳去はしゆく。水勇みずゆう今いま敵味方てきみわが船ふなの相觸あわせざれ。恐おそれ尽つくく。海中うみなか小魚こぎょ入いて魚ぎょの氷ひょうを泳およぐ。如ごとく味方みわがの船ふなよつよつ。時とき。銅山管どうさんかん。

參將陳縣生數艘かずの走船はしん。效率こうりひひり力ぢから合あせ。走船はしんを追討ついとうせんと。十里余よ里り。追蒐さが。走船はしんの深水大洋おうよ。走船はしんを一時ひととき引回ひだ。翌日冰勇ひょうゆう。走船はしんの死傷しあいを点てん検けんする。ふ僕ふく八人じんを損そんする。閩省みんせいの將士しょうしと。初はじて洋戰ようせん。獨用どくよう。史しを喜うれし。孰な中なか陳化成ちんかせいの如ごと。怒いかり。給たまひて曰いく。只ただ。使者ししゃ。對たい。無礼むれいをうそうその見る。

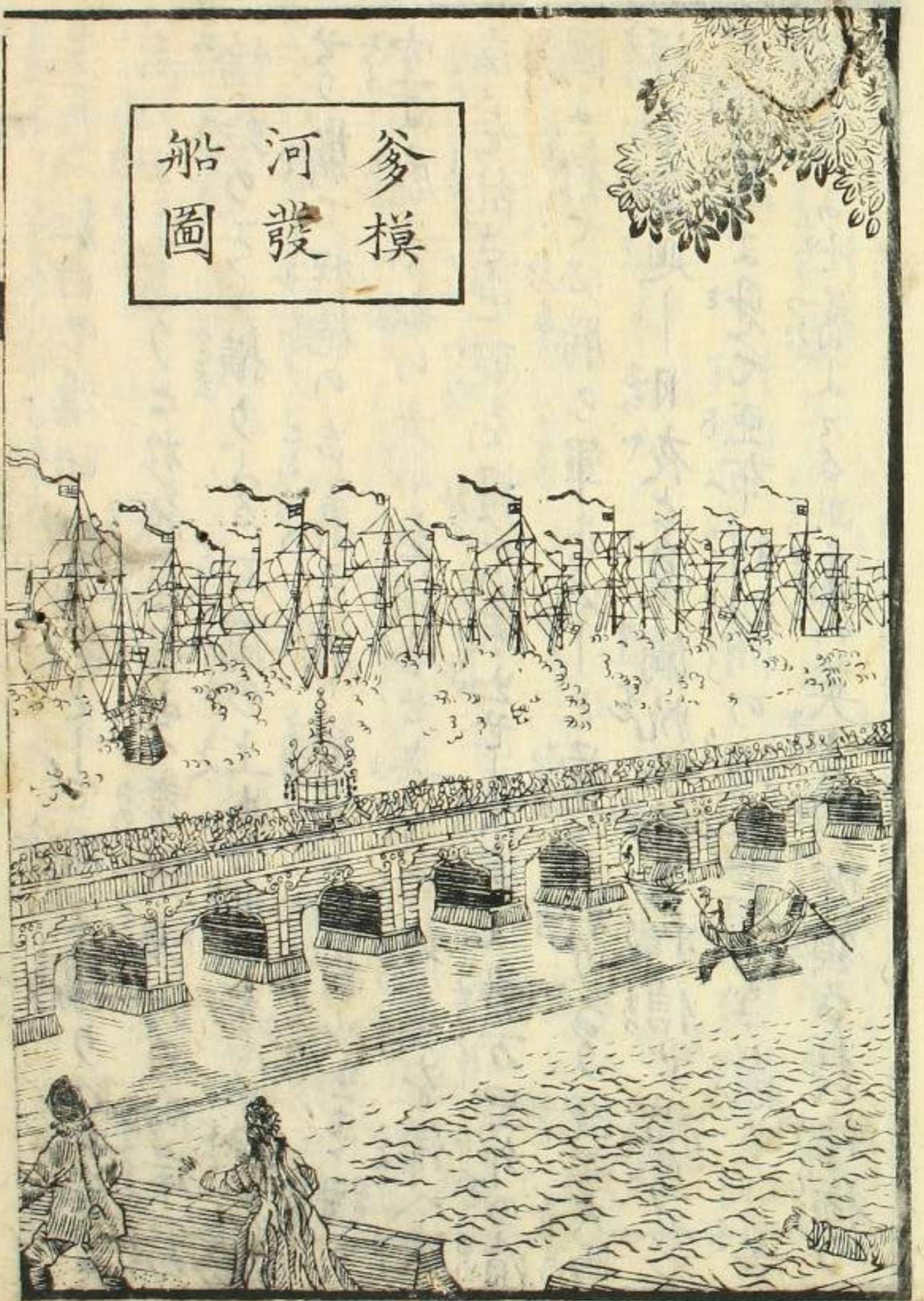
英吉利王命えいきり諸將發船軍事しゆじゆ

英吉利國王えいきりこくおう廣東總督こうとうそうとくの返翰へんかんを一覽いつらん。ありて。大小激おほ激しづ。

ラモ如此暴逆無通り語を以て朕不逐苔アシカシモトモや
自ら中華道德の國と称し有るが其所為を考
小全く禽獸キンジツ異トコロモ元來我を訴き百万画の鴉
片を奪ひ取り其欠金をも償ふべとあく漫りふ我商
民を困苦せしむ今ハ朕坐アシカシモテね成視すふ忍び早速
軍船を進發シテ印度諸島の兵卒を召募り大軍を
舉ハサウエて先清國干要の地を奪ひ爰又擾ハサウエリて是涵ハサウエりと
あハサウエ海邊數千里の間風潮の勢ハサウエリ任せ朝アシカシモテ捺ハサウエタ
叔ハサウエ一或ハ冲合ハサウエモテ北京へ運漕の米穀を奪ひ取り彼
國ハサウエの兵士をもて奔命ハサウエモ疲弊ハサウエセサメハ必ギ計策の

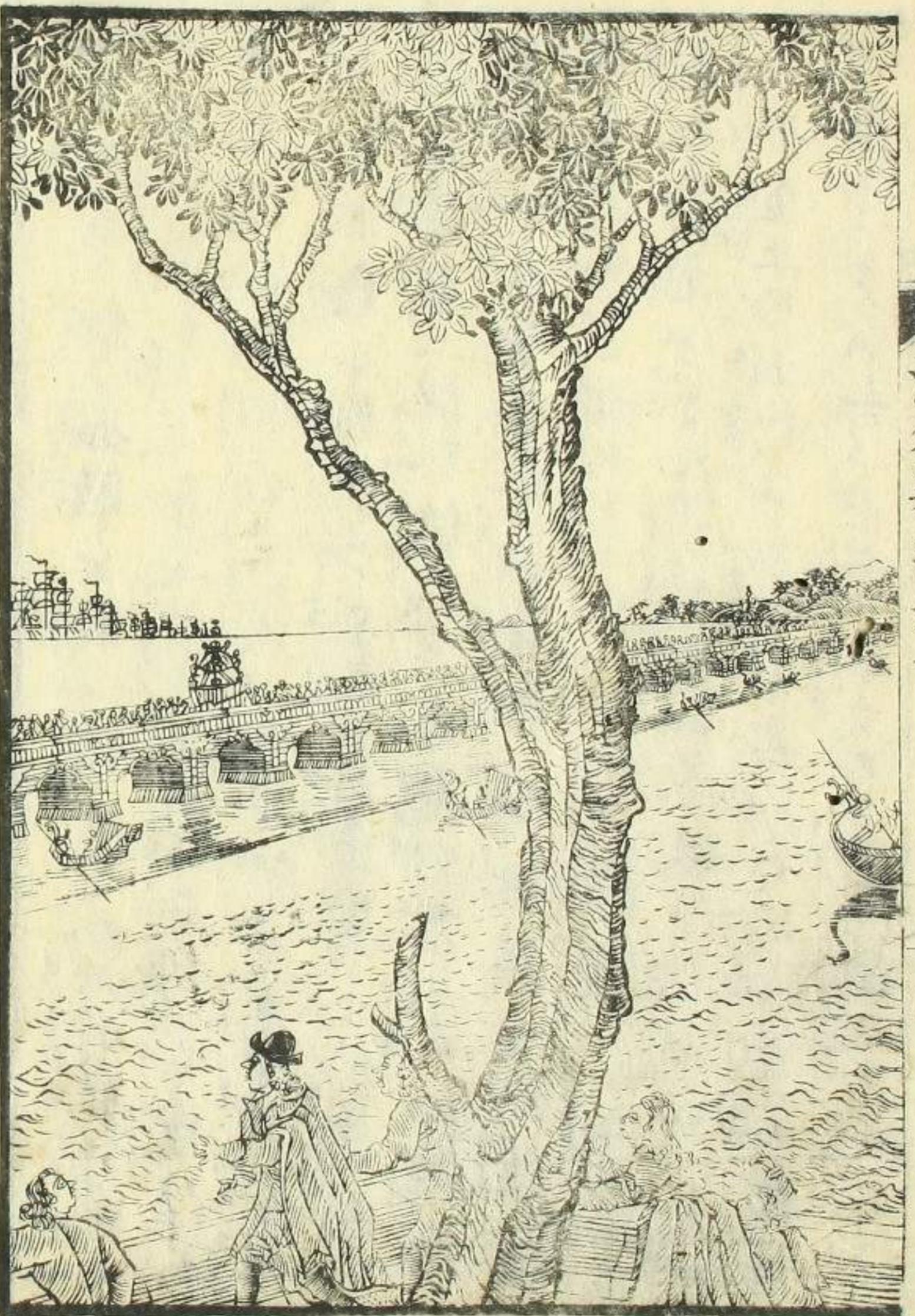
かう研究終小和睦を我よ清んのみ此時鴉片烟の
欠金船軍を出一する費金をのふ日を刻ハシマレバ償ハシマム
シ一林則徐鄧楨廷二人の首を切りて商民の心を慰
めと亦難ハシマム非毛ハシマム發船の用意あるとそ第一總大
將義律并二陸路總兵官布爾利翁三水師將帥
爵子伯麥第四督理機師三戶炮第五副軍機
師竜潭ハシマど始ハシマりとて其他の諸將士鐵城の如き
堅船又の飛ハシマゲハシマた蒸氣船小打乘り其船を以て水
火木金土の五行より配ハシマ各船の兵糧玉葉幾億
万斛ハシマると云初ハシマキニ余丈の高ハシマ檣天ハシマ刺ハシマく

爹模
河渡
船圖



海外奇古卷二

浮夕雜言



十一

主並べ紅白の旗印に返翻とて風揚りひと美々
あに出立あらうこね波見物もる者嘯噴河の両岸へ勿
論虹のぞく横りよる石橋の上生れ川も立ばる程充満
す斯て祝砲の声轟き渡り蒸氣船の吹出せ網り
空よ魔ま船の大小を組合せ寄正の妙変を備へ次
序を乱さず破を揚て衆出せ一の実よ數万里外の清
洋を衆廻一昼夜とく滿帆の風よ打信せ福島元
吉よ於て必勝の軍あぐーと覗る計りより既よ大西
洋よ外慶よ見て亞布利加洲の海邊を過ぎ難く喜
望峯よぞ羨みる此慶の英吉利所領されば雄猛の

兵數千人を召募り猶又船を進めく十臘國の傍ら
うる咲嘴埠へ到着し此島の人民近年殊の外困
窮一生產よ事欠されば英將の金錢を以て乞ひ募
と開て黒坊とも我先ゆ馳集るかく不去年以来廣
東ふあるく法を犯し流落して十臘國へ逃れまし
頼の者ども此事を傳へ聞き我等を清國小生れ海
邊の形勢事情よく知りされば敵地の案内一或ハ漢
字の文書を讀奉らんとて数百人集り來る英將へ大
いよ喜びこわぞ幸の卿同うと言て同く候卒の中
よ差加へ都合數万の軍勢大船五十余艘小船數を

十一月十日早朝ニ鑼を鳴レ鼓を打ち先清國
咽喉の要地を攻取ルと以テヨウ出帆ト遙ニ定海
縣を向ヒリ

英庚附定海城事

抑定海の地ニヤ浙省の所屬シテ錢塘江口ニ對
一孤島ニテ東南の諸省より北京への輸運並
交易の商船凡モ此地ニ碇を寄せ風潮の順逆
を考ヘ而るのち渡海ニ清圓接近の要地ニ而ニ過ギ
ナムア故ニ英吉利の將長先此島を攻取り安
ヌ攫リテ己ニ意を継ふせんとも然ニ本縣主兆公鎮

台長朝發ハ夷船ニテ此地へ押寄シベトノ努力ノ知
ラモ其用意シテありシテ道光二十年皇國天保六年十一月二日二十六艘の軍船湊を指て馳来る忽小又半
月引別れ十三艘ニ直ニ入津一餘ハ何トモア往ニテ
此船の到着後見シや否定海の居民等大ニ恐れ皆々
船ニ乗て上海乍浦の地方へ逃去んとモ縣主兆公ち
先子細を尋ねシト候卒少引携ヘ英夷の大船ニ
衆入り將帥伯麥ハ殊ニ傲慢ニ體めて同僚怒り一
怒ニ伯麥ハ殊ニ傲慢ニ體めて同僚怒り一
張り高声ニ咎マテ此定海の島地ハ從來我英國の所

順あり既小百余年以來商館を建置き我國王より
支那支那を終り近年故あくしてことを奪ひ我
商民の到るを承許さば今國王大震怒一我等小
令ト此地を復せりんとくの一箇又委細の事を書
載せられべ心を静めて披見せよと差し一くる就て兆
公され承披閱する漢字を以て書くる左の文面也

大英國特命 水帥將帥爵子伯麥 敬啓

定海縣主老爺知悉現奉

大英國主命率領大有權勢水陸軍師前徃到此
特意登岓如有佔據定海並所屬各海島至該嶼

居民若不抗拒本國將軍大英國家亦不欲加害
其身家產業也夫粵東上憲林鄧等於旧年行為
無道凌辱大英國主特命正領事義律暨英國別
民人故不得不然占據弁法現今須要保護本國
船隻弁兵一均妥當是以老爺必須即使將定海
所屬各海島其堡臺一均投降故此本將帥統領
招老爺安全投降致免戮但不肯投降本將帥統
領自應即用戰法以奪據之且遞書委員惟候半
個時辰啓覆此時完了而老爺不肯投降並答覆
本將帥統領即行開砲轟擊島地與其堡台及率

兵丁^ヲ登岸特此啓定海縣主老爺閱鑒一千八百

月初四日即道光二

十年六月初五日

兆公へ讀了りて大ふ驚き直す其書を懷中にて去り
とれ成鎮名朝發小示も朝發性急迫の人ありされば
一讀して周章一深く思慮を回らし敵を防ぐの計策
をも為さば唯兵士を招き集て城の内外より出で陣を
張らし又湊^ヲ繫^シある商船漁船取り雜へ是^ヲ數
多の火器を載せ六月八日朝發自ら右の火番船と卒
ひ敵^ヲ向^け一戰を挑む歎心得^ヲと大船十余艘一
文字^ヲ推並^ベ未^ト官兵の打懸^シる^ト早石火矢數十

挺一齊^ヲ又打出一^ヲれば朝發の率^ヲ所の火器船を
打碎^キ百雷^ヲ崩^レ落^ス山海^ヲ震動一數
十の火器船微塵とありて飛散^シ士卒の死傷
數を知らず朝發の乗^る船も今^ハ危く見へるが
是^ヲ援^シんと岸上の臺塲^ヲ大^き石火矢^ヲ強^烈
其猛烈^ヲと誓言^シふものあ然わざも朝發の敵船
小攻近づべき力あらずて漕^シ其餘岸上^ヲ破^ルへ
よ^リ諸將士も^シ負死人の多^シふ恐れ皆^シ城中へ引
退く此機^ヲ窺^ヒ逆走數百艘^ヲ端舟木葉の風^ヲ

吹鼓るどく投卸り立れよ衆て千余人飛より疾く上
陸を官兵城門を打碎うわそへ叶ふまぐと數多の
宋兵を以て積重ね城門をぞ塞ぎり敵既に上陸る
一城近き慶の臺場を奪ひ此ぞ天の喰る所ありと
海ふ臨り石火矢の巢口易くと城の方へ向直一思ふ
俊よ打懸り士卒等これ威見て我先よ逃落んと
の館を打崩り士卒等これ威見て我先よ逃落んと
鎮名朝發も王万年羅建功襲配道の諸將と共に城
の後門より竊々逆行んとモ兆公全福教諭相共ニ残れ
士卒み下知して曰きまア諸將の振舞る万里外の事

人ぞりお背を見せ逃げて何よせん攻入敵を相手ごう
扶く討死まぐ一と士卒ひこれふれ成得て踏止り防戦
一暫時の間よ敵百余切倒せう唯如何せん敵の天
砲頭の上より落東り更小凌ぐべに様あ黒煙城中よ
吹き籠り物の影もまうあくぞ茲は於て夷人の一隊又
北門より攻入て銃付鉄砲を緊く打放つ士卒必死を極
め同ふとりとも今ハ衆寡敵一難く白毛を殺せば黒
毛進ミ黒毛を倒せば白毛援ふ如何せん官兵力尽き
知縣姚ムハ城溝より身を投一教諭ハ敵の為み胸腹
を断割キ典史全福其身罵毛のとある小處傳せり

然れど、聊居伏せば能て敵を罵りて死へる。有様あり、斯て英將の掌事を返す如く、容易ふ城地を攻取され、印度の合戦よりと海陸同時小勝門より更に定海縣の名を改めて安寧縣となる。追て清國海邊の諸城へ攻入るの計を為せり。

袁兆魁探定海夷情事

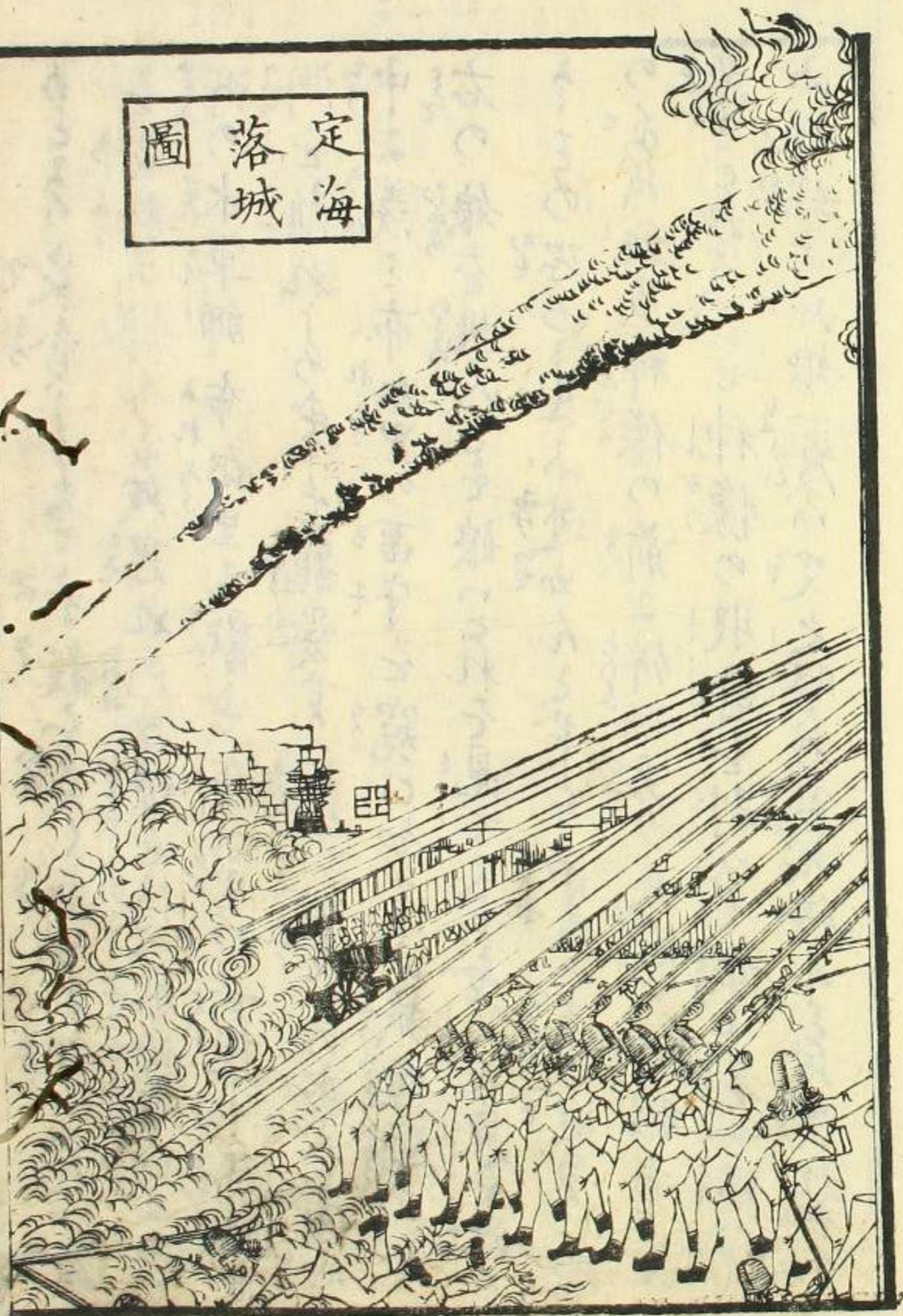
嘆東定海の地を攻め取り、城中の諸將士相共みと虎口の危難を逃れ鎮海城ふに退く。其後の誰一人定海又到り、逆の動靜を伺ひ探らんとする者あらず。空しく日を送り、爰は右宮外員袁兆魁をも者

も鎮臺張朝發の前より命を奉じて自ら定海の事情を探り來らんと成請ふ鎮臺これ成因て大いに喜び早速探り得て歸報を以てとあづれば兆魁先其身よ蓑笠を着け漁人の体よ仕立て小舟よ帆を掛け三十餘里の海程一昼夜みて定海の盤倉庄とりて慶よ着船を夫より上陸す。縣城西南の方より見けふ僅一月をも経ざるふ。其風土大いに変じ中國接近の島地より覓へぞ実よ万里外の夷國へ身を投する心地あり。其故如何とされば土民等乱を避けて四方よ離散し。唯よ里の老人も相連りて

市中を徘徊まわる。又の處ところに牛の生皮ひを以て張つてし
陣屋ぢや多く建並たてならぶへ昼夜ともく屯人とんじん十人二十人完隊かんたいを成
銃付筒じゆつけんを肩こしに荷くわひ陣屋ぢやの内外うわいを巡廻じゆはいして非常ひじょうを警
固ごを四方よのうの城門じゆもんより持来る所ところの大石火矢いはやを備へ
尚又湊みなと々小臺場ちばを築つきびだ星ほし又大筒數百挺すうひとうを候まわ官軍くわんぐん
政來せいらいら一戰いつせんを打倒うちをさんと欲するの勢ぜい城東じゆとう乃紅毛こうもう
港こうとくら慶けいより城内じゆない不向むむかり新しん々小河道こうがいを開鑿かいそく。其
邊へん々商館しょうかんを設おきけ衆しゆう衆しゆう爰あ在ありて万國まんこくと交易こうぎょう通商つうしょう。
其利きりを攫くわせんとするの模様もよう兆魁ちあハこれ等らの車くるまを
圓輪えんりん一又また走人の所為しゆゑを聞きぢやと竊くわひ土民どみんの家いえよ

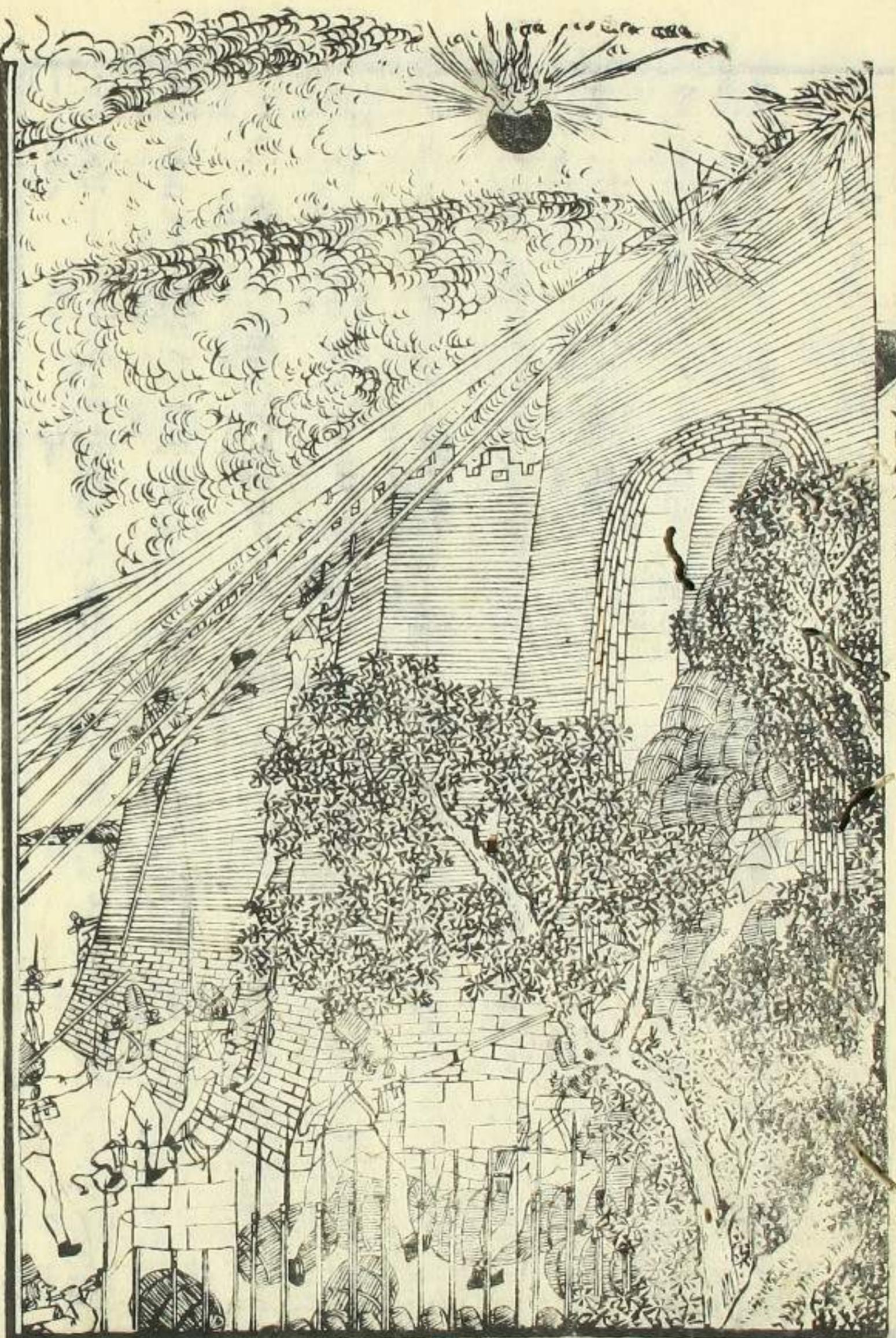
止宿とどき一主人しゆじんに向むかひ事ことの由ゆを問たずる。若人わかじん暴ぬ虐ぎやく殘ざん
忍しのるしのと勝かつて數人すうじんを日ひ々民家みんかを押お入り牛豕雞うし犬いぬの姿すがを奪だつひ去はなり又また婦女ふじょを捕つかへその先少醜美う又また
抵あぞ輪滛りんりんを十日じゅうにち以前いぜん。廷將ていじょう義律ぎりつの下げ知しよ因いんづく縣けん
中の者ものより早速さくそく數万俵ばくの米穀べいこくを差しかまぐきの由ゆあれば
土民どみん等ら是非ぜひあくそそれ發出はつしゆつ。若ゆきる者わかれば直ただよ
其姓名せうめいを以もつて捷き賛さん小加入こいりゆ。頭髮かみを前まへカリ。啞あ葉はを吹ふ。一
黑くろ髮はと同ひとトくこと。驅使く使つか使つか。目めもあくあくれぬ有あ様よう爰あよ
最さいも悪あくひき。宣海せんかいの書生しょじやう陳之賢ちんのせん者しゃ年と十七歲じゅうしじ。成
なな娘むすめあり。此娘性質せいしつ柔じゅうくて容貞殊ことじよ美う麗う文賢ぶんけん。

定海落城圖



海外新說卷二

十九



江戸本居宣長著
りとより家貧して米穀を多く持てず耕はざれば罪
を莫將よ得んと云ふ恐れ已が娘を携へ城隍廟内にあり
所の水軍師 布ル里よ獻き布ル里の喜悦一 暫時も
側を離れぬぞと寵愛せり爵子伯麦との事を因心
中又羨み布ル里の番守を窺ひ知らふ城隍廟に入り
右の娘を挑んと娘へこれを見て又も老人と身を汚さ
くもの恐ろしも外出んとせしめ伯麦の直迫り娘
の身代執り神像の前と伴ひ至り衣服の汚穢うる怨
悪しきれ脱せ神像の服飾を剥ひて娘よ着せ思へば
か奸姫也此娘一度ハ父之賢の眾に得んと畏れ布ル

里の為よ其身を許せうとも今又伯麦の為よ奸姫せ
られ屡汚辱を受ふ忍びを冷むべ一此夜ひそみ廟外の
井中自身を投して死一ぬと兆魁へ此ちの事を残りて
間探り又東北の海岬の馬番小沙大沙大展北岸奉
港そんとう地を探廻一通事の状情尽く探りゆえ
再び漁舟小打乗り難か鎮海よ帰着して數日見
聞する所の事ごと逐一鎮臺の前と報告まで鎮臺の功
功を大の小威ド早速その由を北京へ進奏沙夷兆魁
の如き深く細間の術を得る者と謂べ一

出青田縣怪獸事

此頃世間か不思議の事、とも多き中、慶州府青田
縣の山中、よう一つの怪獸頭れぬて、此方彼方とまざり、
或時樹の梢み攀ぢ登り、又巖穴之内に身
隠し、兩小鳴き風よ叫び、若く夜間城市に到り家
の門戸を敲き、人の脇りに覓見、その丈余、兩
頭層り合ひ、上の頭、又雙目を開き下の一頭、小二目と
開く二手両脚、共に四ソの指ありて、其爪利き、革錐の
如き、且つ上の頭頂み拒む、青烟を吐き云々、人
の煙氣よ觸るやうな日を歴むて、必ず死を慶州の
土民等、その毒氣に受け死するもの數百人、小及べず、全

怪獸圖



体小綠色の鱗甲有て堅牢と金鎖との合も及ぶ
至る一勇民獸の身を窺ひ刀を把てこれに迫り
擊殺せんとせしゝが獸巍然として動ふ其刀の身は
及んとする時忽ち青烟を吹出一形をその中へ隠
一何處とも無く逃去りぬ後まゝ一人あり鐵砲と以て
打懸す其玉尽く獸身より中るとの人乎も聊う穿入先
程と能ひぞ獸猶地上よりて跳舞戯嘲モ鎮其事より
も軍民等下令して自此獸を捕へ獲る者あらず千金の
褒美を與へんとあり一も軍民等青烟の毒氣不
觸れんことを畏れ敢てこれを捕る者あらず康熙四十九年

自此歎粵省の海邊小虫とも此度の如く人民を傷ふと
絶て無く終て海中不身を投す時其声雷震の轟く
如く數百里外より振動せしとある

